『源氏物語』空蟬の単衣と小袿の位相

――空蟬の苦悩と尊厳――

堀江　マサ子

はじめに

空蟬巻では衣が印象深く描かれる。林田孝和氏は「空蟬の薄衣」で、「この物語の重要な小道具に、空蟬がぬぎすべらかした薄衣がある」[註1]と、指摘する。確かにそうであるが、空蟬巻にはその薄衣だけではなく、衣描写じたいが重要な小道具になっており、物語の展開を担う方法となっている。

源氏が紀伊守邸で空蟬と軒端荻を垣間見る次の場面は、対比して二人の衣描写が描き分けられる。

灯近うともしたり。a母屋の中柱に側める人やわが心かくるとまづ目とどめたまへば、濃き綾の単襲なめり、何にかあらむ上に着て、頭つき細やかに小さき人のものげなき姿ぞしたる、顔などは、さし向かひたらむ人などにもわざと見ゆまじうもてなしたり。手つき痩せ痩せにて、いたうひき隠しためり。b いま一人は東向きにて、残るところなく見ゆ。白き羅の単襲、二藍の小袿だつものないがしろに着なして、紅の腰ひき結へる際まで胸あらはにばうぞくなるもてなしなり。……をかしげなる人と見えたり。むべこそ親の世になくは思ふらめと、をかしく見たまふ。

（「空蟬」①１２０）

この垣間見の場面について、川名淳子氏は、実際の状景に即してではなく、俯瞰的に描く物語文学の方法によってなされていると指摘する。[註2]そして、垣間見られる描写は、「目とどめたまへば、濃き綾の単襲なめり」「いたうひき隠しためり」「見えたり」「見たまふ」と、目で見て推定する助動詞「めり」や「見る」という動詞を使い、[註3]確認できたことには「たり」「なり」が使われて場面に固定される。

二人の女君は源氏の視線から捉えられ、二人のそばの「近うとも」されている「灯」によって見える設定になっている。(a)母屋の中柱に側める人は、「わが心かくる」人、つまり、空蟬であり、「濃き綾の単襲なめり、何にかあらむ上に着て」と、空蟬の衣描写は源氏の視線によって不確かではあるが捉えられる。「何にかあらむ上に着て」は、後述の「かの脱ぎすべしたると見ゆる薄衣（「空蟬」①１２７）」、「かの薄衣は小袿（「空蟬」①１３０）」の描写から分かるように、源氏に持ち去られる小袿のことである。衣描写の後、空蟬の「頭つき」、「顔など」、「手つき」が叙述される。「頭つき」は、中柱の側で横向きであり、「顔」は、源氏の視線から「見ゆまじう」振る舞われており、「手つき」も「いたうひき隠し」ているように見える。空蟬の輪郭は明確に見えない様子で描かれる。それに対置する形で、(b)いま一人、軒端荻は「白き羅の単襲」と「白き羅」

であるから、肌が透けて見える衣の上に、「二藍の小袿だつもの」を「ないがしろに」着ている。「胸あらはにばうぞく」と性的なまめかしさが感じられる風体である。源氏はその娘の魅力にも惹かれている。空蟬の様子は「見ゆまじう」「ひき隠し」と描写されるのに対して、軒端荻の方は着方のだらしなさまでが「残るところなく見ゆ」と表現される。見えにくい空蟬と露わに見える軒端荻というふうに語り出される。

本稿では、衣が注目される表現の世界を改めて考え、空蟬の単衣と小袿の薄衣に着目して考察する。

一、特権的な存在の単衣

『源氏物語』正編の衣描写について、衣装がそれを纏う者を象徴し、その人格と気品と特性を表すもの[註4]という指摘があるが、それらは源氏の視線に捉えられた女君の衣装の表象であった。六条院世界が源氏に縄縛されている以上[註5]、女君たちの衣も源氏の意に従ったものである。女君の衣装の個性は、女君独自のものではなく、光源氏のまなざしによってつくられたものであった。そんな事情を勘案すると、衣の中で単衣だけは最後の砦として着る人を表象するものであったといえよう[註6]。

そもそも単衣とは、『古事類苑』によれば、「単衣ハ、古クヒトヘギヌト云ヒ衫ノ字ヲモ書シ、凡テ衣ノ裏ナキモノ、通稱ナリシヲ、中世略シテヒトヘト稱シ、多ク單ノ一字ヲ書シ、專ラ袍、直衣等ヲ著スル時ニ、帷ノ上、衣ノ下ニ重ヌルモノ、名トナレリ[註7]」とある。近藤富枝氏も、単衣は「肌着である[註8]」と定義する。平安時代には、男も女も単衣を肌着として着用したと考えられる。

『源氏物語』で描写される肌着の中で一番下に着るものが単衣である。その単衣の下に着用した「帷子」は、『源氏物語』には叙述されない。ちなみに『源氏物語』で「帷子」と表現されるものは、一七例あるが、内、一四例が几帳の帷子、三例が御帳の帷子である[註9]。衣の帷子が描かれないことから、単衣が最も人に近い肌着として『源氏物語』には、表現されているといえよう。『日本服飾史辞典』の帷（帷子）の項の「帷は片ひらの意で単の裂の意から変った単のことである。藤原時代に汗取として肌に着る下着を帷子ということとなったのであろう[註10]」とある説明が、『源氏物語』には当てはまる。つまり、『源氏物語』では、衣の帷子も単衣もすべて単衣と表現されている。空蟬が軒端荻と囲碁をしている場面では「濃き綾の単襲」が描写され、源氏から迫られ逃れ去る時、身に掛けてすべり出た単衣は、「生絹なる単衣」であった。つまり、垣間見られた折の空蟬は、「生絹なる単衣」、「濃き綾の単襲」、「小袿」と重ねて着ていたのだろう。「生絹なる単衣」は、帷子と考えてもよいだろう[註11]。この「生絹なる単衣」は、源氏の視野には入っていない。

ここで、単衣の持つ古代信仰を、『万葉集』から見てみよう。

ま玉つくをちをこち兼ねて思へこそ一重の衣一人着て寝れ
（二八五三番歌）

我妹子が下にも着よと贈りたる衣の紐を我れ解かめやも
（三五八五番歌）

我が旅は久しくあらしこの我が着る妹が衣の垢付く見れば
（三六六七番歌）

二八五三番歌は、逢ってくれないことを恨んできた相手に対して、

遠い将来結婚できることを考えて、（今は世間がうるさいので）一重の衣を一人で着て寝ているとの釈明の歌である。単衣をひとりで着て寝ているというサインは、他の女とともには寝ないであなたのことだけを思っている意を表す。後者の歌二首は、「下にも着よと」や「妹が衣の垢つく」の表現から、この衣は単衣と考えられる。旅に行く時、愛する者同士が単衣を互いに脱ぎかえて着て相手を守る信仰が、『万葉集』にはある。単衣は単なる肌着ではなく、元来、着る人を守る呪具でもあった。

この思想は、平安時代まで尾を曳いていたのだろう。『落窪物語』の落窪の姫君と少将が契った後朝の描写にも、次のように単衣が描かれる。

臥したまへれば、女、死ぬべき心ちし給ふ。単衣はなし。袴一つ着て、所どころあらはに、身につきたるを思ふに、〈いといみじ〉とはおろかなり。……少将、起きたまふに女の衣もひき着せたまふに、単もなくて、いとつめたければ、単を脱ぎすべし置きて、出でたまふ。女いと恥づかしきこと限りなし。

（新編日本古典文学全集『落窪物語』四一、四二、四三頁）

しいたげられていた落窪の姫君は、継母の意地悪により単衣を着ていなかった。少将は「単もなくて、いとつめたけれ」と思い、自分の単衣を脱ぎ残して起きる。『落窪物語』の場合は姫君を不憫に思い単衣を「脱ぎすべし」たが、姫君は羞恥心の中でもその単衣を受け入れている。この場合の後朝の単衣の描写では、寒さを防ぎ姫君の尊厳を保つために、男君が女君に単衣を脱ぎすべして残したことになる。継母から人間の尊厳を守る単衣さえ与えられていない屈辱の中で過ごしていた女君に、自分の単衣を掛けて少将は守ろうとしている。

身を守るだけでなく、単衣には人間関係の根源と関わる象徴的な機能が付与されていた。単衣が本来持っている特性とは、その人の奥深いものと関わるものである。単衣は、最もその人の肌と直に触れあうものであり、魂[註12]を直に包むものである。たとえば拾遺和歌集に、次の歌がある。

夏衣薄きながらぞ頼まるゝ一重なるしも身に近ければ

（恋三、八二三、よみ人知らず）

単衣は、「薄く一重であるその点こそが、肌に近く隔てが少ないということなので（『和歌文学大系32』の脚注）」あてにできると歌われる。二人で掛け合って眠った単衣への期待がこの歌の根底にはあり、「夏の単衣を恋人に見立てていう（同脚注）」と記されている。単衣は最も肌に近い衣であり、恋人の存在そのものになっている。

古代の人は、恋人同士が単衣を取り替えて着たり、単衣を掛けあって眠ったり、自分の単衣を脱いで残してきたりする。単衣は、肌の最も近くで人を包むものであり、尊厳を守るものであり、頼りにできる特権的な存在である。

二、『源氏物語』の単衣の位相

『源氏物語』の単衣の用例は一八例[註13]であり、その位相を大別すると、その人の代償としての単衣、単衣の内よりこぼれ出る美しさ、身体、ひいてはその人の尊厳を守る単衣、実用としての単衣などとなる。

その人の代償としての単衣として、雲居雁が涙する夕霧の単衣があげられる。

なよびたる御衣ども脱いたまうて、心ことなるをとり重ねてたきしめたまひ、めでたうつくろひ化粧じて出でたまふを灯影に見出だして、忍びがたく涙の出で来れば、脱ぎとめたまへる単衣の袖を引き寄せたまひて、　（「夕霧」④475）

雲居雁は、落葉宮のもとへ行く夕霧になす術もなく「単衣の袖を引き寄せ」て泣くしかなかった。夕霧が「なよびたる御衣ども」を着替えることは、単衣を重ねて眠った雲居雁の魂が移っていた単衣をも脱ぎ捨てることになる。新しい衣は、落葉宮を包むものである。その衣を入念にたきしめて夕霧は着る。極限状況に追い込まれた雲居雁は、夕霧の脱いだ単衣に涙するのである。雲居雁にとって引き寄せた単衣は、夕霧の代償としての単衣であった。

単衣の内よりこぼれ出る美しさとしては、源氏自身もその美が表象される人であった。

大将の君、御衣ぬぎてかづけたまふ。例よりはうち乱れたまへる御顔のにほひ、似るものなく見ゆ。羅の直衣、単衣を着たまへるに、透きたまへる肌つき、ましていみじう見ゆるを、年老いたる博士どもなど、遠く見たてまつりて涙落としつつゐたり。　（「賢木」②142）

源氏が三位中将と文作りや韻塞などをした折の出来事である。衣を脱いで褒美として与えた後の、源氏の単衣から肌が透けて見える美しさである。かづける褒美の衣に、習慣として自分の単衣は入れない。なぜなら単衣はそれを着用する人との境界でありながら、そうであるが故に、その人の一部ともなっているからだ。

他にも、昼寝の雲居雁（「常夏」③238）、うたた寝の中将の君（「幻」④538）、単衣姿の女一宮（「蜻蛉」⑥249、251）の単衣から透けて見える美しさが描かれる。どの場合においても、その人の美しさの本質がもっとも表れる単衣姿として描かれる。

浮舟は、はなやかな衣を自分で脱いで宇治の邸を抜け出し、力尽きて木の下に倒れていた。「白き物のひろごりたるぞ見ゆる（「手習」⑥281）」の表現から、浮舟が発見された時は白い肌着だけであったことが分かる。[註14] 意識不明の時間を経て、手習巻では東屋巻の浮舟の着ていた「紫苑色のはなやかなるに、女郎花の織物と見ゆる（「東屋」⑥60）」のような華やかな衣は姿を消し、浮舟は単衣姿で登場する。

姫君は、我は我と思ひ出づる方多くて、ながめ出だしたまへるさまいとうつくし。白き単衣の、いと情なくあざやぎたるに、袴も檜皮色にならひたるにや、光も見えず黒きを着せたてまつりたれば、かかることども、見しには変りてあやしうもあるかなと思ひつつ、こはごはしういらぎたるものども着たまへるしも、いとをかしき姿なり。　（「手習」⑥307）

意識を回復した浮舟の「白き単衣の、いと情なくあざやぎたる」姿こそ、浮舟が自分を取り戻した単衣姿であろう。「姫君は、我は我と思ひ出づる方多くて、ながめ出だしたまへるさまいとうつくし」と描かれる。この場面の衣は、改築された三条宮へ引っ越す時の落葉宮のように「我にもあらず（「夕霧」④467）」着せられた衣ではなく、「我は我と思」う意識のもとで着ている衣である。浮舟は単衣に自分自身を見いだしていた。単衣の上には、「光も見えず黒きを着せたてまつりたれば」とあるように黒い衣を来ていたが、浮舟の美しさはこぼれ出ていたのである。

実用としての単衣表現には、初瀬詣での単衣めくものを着ている

玉鬘を右近が見る場面が挙げられる。

右近は、人知れず目とどめて見るに、中にうつくしげなる後手のいといたうやつれて、四月の単衣めくものに着こめたまへる髪のすきかげ、いとあたらしくめでたく見ゆ。心苦しうかなしと見たてまつる。

（「玉鬘」③１０９、１１０）

玉鬘は、旅にあって単衣めくものに髪を着こめている。髪を着こめるのは、旅の途中のこととて髪が邪魔にならないようにするためだろう。ここでの季節はおそらく晩秋なのに「四月の単衣めくもの」を着ている玉鬘である。玉鬘の女房は、季節が変わってもそれを気づかう余裕がない。都で生きることに精一杯であるから、「四月の単衣めくもの」を玉鬘は着ていたのだろう。[註15] この単衣めくものは、実用そのものの衣である。

身体を守る単衣として、落葉宮が単衣を着て塗籠に籠もる時の単衣がある。

単衣の御衣を御髪籠めひきくくみて、たけきこととは音を泣きたまふさまの、心深くいとほしければ、……嘆き明かしたまうつ。

（「夕霧」④４７９）

空蟬が単衣を大切にしたように、落葉宮もその単衣で身を守った。落葉宮が最後の砦とした単衣こそ、落葉宮の自分自身であった。他人から押しつけられた衣は脱いでいたが、自分の魂を直に包んでいる単衣は脱ぎたくなかったのであろう。塗籠の中で単衣をひき被って声を立てて泣く落葉宮の姿は、自分を守ろうとしたことは分かるが、異常とまで見える。落葉宮は皇女であるから、その崇高な皇女の魂をその単衣で守ろうとしたのであろう。

『源氏物語』では、それぞれの場所で単衣は着用され、その着用した人物を特徴づけている。シンプルな白や黄や薄紅色などの単衣は、物語の中で重要な役割を持っている。個性がないように見える単衣を描き分けることで、それを着る人物の個性を際だたせている。

三、空蟬の単衣と源氏の手にした小袿の薄衣

さまざまな場面において、単衣は物語の重要なポイントとして描かれる。着用された単衣を軸としてみれば、空蟬の衣についても違った見方が出てくる。空蟬は単衣を大事にしていたことが、次の場面には表れている。

灯明き方に屏風をひろげて、影ほのかなるに、やをら入れたてまつる。……いとやをら入りたまふとすれど、みなしづまれる夜の御衣のけはひ、やはらかなるしもいとしるかりけり。……若き人は何心なくいとようまどろみたるべし。かかるけはひのいとかうばしくうち匂ふに、顔をもたげたるに、ひとへうちかけたる几帳の隙間に、暗けれど、うちみじろき寄るけはひいとしるし。あさましくおぼえて、ともかくも思ひ分かれず、やをら起き出でて、生絹なる単衣をひとつ着てすべり出でにけり。

（「空蟬」①１２３、１２４）

空蟬は、源氏の訪れを「御衣のけはひ」により察知し、その「かかるけはひのいとかうばしくうち匂ふ」様子、つまり、その「匂ひ」によって源氏の存在に気づき、源氏を逃れ、「生絹なる単衣をひとつ着てすべり出でにけり」と、隠れるのである。すべて薄暗い中で、「やをら」「いとやをら」行なわれた。空蟬は逃れる時、「ともかくも思ひ分かれず」と、無意識のうちに単衣だけを掛けて部屋を出た

ことになる。

空蟬は、単衣を着て源氏を逃れた人であった。つまり、空蟬は、最後の瞬間においてその単衣を着て逃げる貴族性を有していたことになる。空蟬は単衣を守ればよかった。単衣だけは手放さなかったことによって、受領階級の妻という低い身分ではあるが、ギリギリの貴族の範疇に空蟬はとどまったことになる。単衣を着ることによって、人が人として認識される。人間であることは、単衣を着ていなければならないのである。

人間であることを単衣で守った空蟬とは異なって、源氏は空蟬のもとから持ち帰った小袿の薄衣に執着していく。ここで注目されるのは、源氏は空蟬の着ている衣の一番外側の小袿を、偶然ではあるが持ち去ったことである。単衣が肌着であるのに対して、小袿は、「裳唐衣に次ぐ女房装束の礼服[注16]」、「小袿を衣冠に擬す[注17]」と記されるように、対面の折の略礼服の衣や布施の衣として『源氏物語』では描かれている。そういった意味合いを持つ小袿の薄衣に、源氏は執着していくのである。

①かの脱ぎすべしたると見ゆる薄衣をとりて出でたまひぬ。……小君、御車のしりにて、二条院におはしましぬ。……「いと深う憎みたまふべかめれば、身もうく思ひはてぬ。などかよそにても、なつかしき答へばかりはしたまふまじき。伊予介に劣りける身こそ」など、心づきなしと思ひてのたまふ。ありつる小袿を、さすがに御衣の下にひき入れて、大殿籠れり。

（「空蟬」①127、128、129）

②かの薄衣は小袿のいとなつかしき人香に染めるを、身近く馴らして見ゐたまへり。

（「空蟬」①130）

①は源氏の夜の様子、②は昼の様子である。空蟬の様子を「心づきなし」と恨む源氏ではあるが、そうであるが故に空蟬への思いは深まり、小袿をその人と思い、共寝する。「身近く馴らして」の表現には、空蟬の感触を反芻している源氏がいる。一方、空蟬は「あやしく夢のやうなることを、心に離るるをりなきころにて、心とけたる寝だに寝られず、昼はながめ、夜は寝ざめがち（「空蟬」①124）」であって眠れない思いに悩んでいた。この空蟬の思いは、源氏には届かない。源氏には、空蟬が「うれたき人（「空蟬」①126）」「執念き人（「空蟬」①126）」と映る。源氏は空蟬の悩みに気づくことはない。

空蟬の外側を纏う小袿を空蟬と思い大切にした源氏は、空蟬の本当の女心を知ることができなかったし、知ろうともしなかったことになる。その抜殻を抱いて幾夜も眠り、「見ゐたまへり」とあるように、源氏のまなざしに空蟬の小袿は、常に捉えられていた。そして、その小袿の薄衣を、「御衣の下にひき入れて」とあるように、自分の夜着て眠る単衣（御衣）の中に入れて眠っている。源氏の匂いは空蟬の小袿に移っていく。空蟬の匂いのこもっている衣に、源氏の匂いを移したといえよう。その衣はその年の十一月上旬に空蟬が夫の任国にともに下向しようとした時、返戻される[注18]。衣だけが知っている二人の心の交流であった。

しかし、源氏の空蟬の小袿への思い入れに対して、空蟬の本当の心は本人が着ていた単衣にこそ包まれていた。単衣の存在は、小袿とは別の次元にある。空蟬は、倉田実氏の指摘する「数ならぬ身[注19]」の次元に生きる。源氏は、空蟬の単衣の次元にまで降り立つことはない。なぜなら、源氏にとって女君の衣は、その外側を覆う美しい

衣装としてしか視野に入っていないからである。二人の階級差が衣の認識の差異となり、二人の心のすれ違いを引き起こす。空蟬と源氏は、一人ひとり生身の人間であり、生身の人間であるからかえって分かりあえない部分を抱えている。源氏の手にした小袿の薄衣と空蟬の単衣の表現方法は、二人の衣に対する認識の差異を確認させる。単衣にはもともと近藤富枝氏のいう「五センチから七センチほど大きく仕立てることは、実用上のメリット」と、「姿を華やかに、色っぽく見せるのに役立つ」要素の二面性があった。[註20] 空蟬は実用面、美的面の両面的要素を具備した単衣を大切にしたことになる。日常性と非日常性とでもいえようか。鈴木裕子氏は、「彼女は単に「身の程意識」に呪縛されて泣く泣く光君を諦めたというよりは、非日常に憧れつつも日常を捨てきれなかったという点に特質があるのではなかろうか」と指摘するが、[註21] その表象が空蟬の単衣表現であろう。源氏はそれとは次元の異なる女君の外側を覆う小袿の表象する美的認識の世界にいたと考えられる。

四、単衣に刻まれた空蟬の運命

源氏は「ありつる小袿」を持ち帰った後、小君に託して歌を空蟬に贈っている。

空蟬の身をかへてける木のもとになほ人がらのなつかしきかな
（「空蟬」①129）

「なほ人がらのなつかしきかな」と、逃げられてもやはり執着を断ち切れぬ懐かしさを詠んだ歌である。[註22] それに対して、空蟬は返歌にもならないつぶやきを、その歌が書かれていた畳紙に書きつける。

空蟬の羽におく露の木がくれてしのびしのびにぬるる袖かな
（「空蟬」①131）

源氏の歌では、空蟬の小袿を空蟬と思い、その人柄と掛詞の「殻（衣）」が詠まれている。それに対して、空蟬は、「しのびしのびにぬるる袖かな」と詠む。[註23] この涙に濡れている袖は、実は、空蟬の単衣の袖なのである。源氏の小袿への思い込みの恋に対して、自分自身を身近で守ってくれる単衣に涙しなければならない空蟬の心は、源氏には分からない。[註24] 空蟬に喩えられる小袿と空蟬の単衣への思い入れの違いが、二人の存在感覚のずれを際だたせている。

空蟬が涙したのは単衣の袖であったことは、当時、涙をぬぐうのは単衣の袖であったことが分かる記述があるからだ。実際に衣を縫う女である『蜻蛉日記』の作者が、涙を拭くのは、単衣の袖であった。[註25] 天禄三年の件、兼家が他女に生ませてすっかり忘れていた娘を道綱母が引き取り、兼家と対面させる場面にその描写がある。人々は感動の涙の中にいる。「単衣の袖あまたたび引き出でつつ泣かるれ」と、道綱母は、単衣の袖で涙を拭いている。「泣かるれ」の「るれ」からこの涙は自然に出てきたものであり、無意識にその涙は、単衣の袖で幾度も拭かれる。当時の習慣として、涙は、洗濯が比較的可能な単衣の袖で拭いていたと考えられる。

空蟬巻に戻る。「伊予介、神無月の朔日ごろに下る」とあるように、夫が任国へ下る時、空蟬もともに下向することになる。夫についてともに下ろうとする空蟬への「手向け」を、「こまやかにをかしきさまなる櫛、扇多くして、幣などわざとがましくて、かの小袿も遣はす」とあるように、源氏は贈る。

逢ふまでの形見ばかりと見しほどにひたすら袖の朽ちにけ

るかな

……御使帰りにけれど、小君して小袿の御返りばかりは聞こえさせたり。

蝉の羽もたちかへてける夏衣かへすを見ても音はなかれけり

思へど、あやしう人に似ぬ心強さにてもふり離れぬるかなと思ひつづけたまふ。今日ぞ、冬立つ日なりけるもしるく、うちしぐれて、空のけしきいとあはれなり。（「夕顔」①195）

源氏の手向けの品の中に、源氏が持って帰り、空蟬と思って大切にした空蟬の小袿もあった。源氏は、人並み外れた強情さ故に空蟬は別れていったと思い続ける。源氏のこの空蟬の心の解釈は、空蟬の心とは懸隔していた。「夏衣かへすを見ても音はなかれけり」の空蟬の歌には、強情に源氏を拒否したものの、その片隅で「音はなかれけり」と声を立てて泣いている空蟬が描かれる。空蟬が詠んだ歌は『源氏物語』に七首見受けられるが、四首までが「音もなかれける」「しのびしのびにぬるる袖かな」「音はなかれけり」「せきとめがたき涙をや」と、自分の泣く姿を詠んでいる。その内、二首が独詠歌である。他人に対しては気丈にふるまう空蟬が、ひとりになると泣いてしまう様子が四首の歌には窺い知れる。空蟬の二面性とでもいえようか。自分の衣に移った源氏の匂いに、ぞっとするような恋情がわいたのだろう。空蟬は涙の中にいる。空蟬垣間見の場面にも、「目すこしはれたる心地（「空蟬」①121）」と、空蟬の顔に源氏を思って眠れないで泣いた痕跡は残っていた。しかし、空蟬が源氏を思って涙を流したという理解に、源氏は及ばない。

源氏にとっては、蟬の抜殻を抱きしめるような恋であった。それに対して、空蟬は、受領の妻だから逃げた、いや受領の妻ゆえに[注26]眠ることもできないほど悩んだ源氏への思いを、返戻の薄衣を前にたぎらせ、反芻している。空蟬は「思ひ」、源氏は「思ひつづけたまふ」[注27]と、対比して思っているが、すれ違っている思いなのである。

単衣と小袿のそれぞれの位相に、空蟬と源氏の心は置かれている。源氏の恋が中の品の階級の女とのふとした恋であったのに対して、空蟬の場合はこの恋に躓くとどこまで落ちていくか分からない、生きる基盤が根絶するかもしれない危険な恋であった。林田孝和氏の「源氏の小袿を返してきた行為は彼女の魂の返戻[注28]」との指摘は、万葉人が肌着を取り替え、相手の下紐を結んだ恋の位相のそれであり、空蟬の恋の位相とは異なる。林田孝和氏の指摘する「『源氏物語』は現代文学を凌駕する表現のなかに、意外に古代が息づいている[注29]」ことは確かに認めるが、その古代はずらされて移し植えられ、息づいているのである。

衣の位相差による二人の意識は、初音巻の空蟬の尼衣（「初音」④155）に回収されていくが、その時も空蟬は、「まことにうち泣きぬ」と、自分の尼姿を源氏に見られる悔し涙を流している。それは、強い自尊心故に悔しい人生を余儀なくされた空蟬の単衣に示された運命でもあった。空蟬の運命は、単衣に刻まれている。

結びに

単衣は、『源氏物語』の肌着の中で、最も肌に近い存在として描かれる。もともと、衣は着る人の魂を入れる器であった。その衣の中の単衣で、人々は自分の魂の流出を食い止めようとした。空蟬が単

衣を着て源氏のもとから逃れ去ったのは、自分を守るためでもあった。一方、源氏は空蟬の小袿を持ち去り、昼夜、そばに置いて懐かしむことになるが、単衣と小袿の位相差がそのまま源氏と空蟬の恋の位相差を表している。垣間見の場面で、源氏に空蟬が見えにくかったのも、空蟬の心が源氏には本当のところ分からないことを暗示していたのかもしれない。

二人の心の微妙なずれは、単衣と小袿の二つの衣に見られる空蟬と源氏の心のずれであった。空蟬の数ならぬ身の思いと空蟬の単衣への認識には気づかない源氏の思いが、このずれ具合には表れている。それは、二人の衣に対する感覚の違いでもある。

註

（1）林田孝和「空蟬の薄衣」（『むらさき』29号、武蔵野書院、一九九二年、六四頁）。

（2）川名淳子「空蟬巻の垣間見―「中柱にそばめる人」」（『東横国文学』27、一九九五年三月）。

（3）藤田加代氏は「空蟬」で「この垣間見の場面を作者は十五例の「見す」「見る」「見ゆ」によって構成する」と指摘する（『人物で読む『源氏物語』』第五巻―葵の上・空蟬、二八六頁）。

（4）三田村雅子氏は「浮舟物語の〈衣〉―贈与と放棄―」で『源氏物語』正編に描かれる衣を一般論として捉えてこのように指摘している（『源氏物語 感覚の論理』有精堂、一九九六年、三一四頁）。

（5）六条院世界の源氏による縄縛については、秋山虔氏『源氏物語の世界』（東京大学出版会、一九六四年、一一九頁）、高木和子「玉鬘十帖論」（『源氏物語の思考』風間書房、二〇〇二年、二三七頁）にその指摘がある。

（6）単衣がその人個人の本質がこぼれ出るような特性を表す例は、『古事記』允恭天皇の件の衣通姫、『源氏物語』では、本稿「二、『源氏物語』の単衣の位相」で掲げた用例、『狭衣物語』では、「隠れもなき御単衣に透き給へる」源氏宮など、枚挙にいとまがない。

（7）吉川弘文館刊『古事類苑 服飾部 単衣』の項による。

（8）近藤富枝『服装から見た源氏物語』凸版印刷、一九八七年、二三頁。

（9）『源氏物語事典』（東京堂出版、一九八七年）による。

（10）河鰭実英『日本服飾史辞典』（東京堂出版、一九六九年、五一頁）。また、あかね会編『平安朝服飾百科辞典』（講談社、一九七五年）には、『うつほ物語』『三宝絵詞』『蜻蛉日記』『枕草子』などの多くの作品の帷子の用例が、示されている。

（11）倉田実「空蟬の衣―天の羽衣と尸解仙、そして〈逢ひて逢はぬ恋〉の生成―」には、「光源氏の気配を察した空蟬は、逃れようとして、生絹なる単衣を一つ着て、すべり出ていたが、ここでは「綾」ではなく「生絹」になっている。この違いは光源氏による見間違えか、「濃き綾の単衣」は脱がれていたか、空蟬が着替えていたか、などになるが、このあたりはよく分からない」とある（『国文学解釈と鑑賞別冊 源氏物語の鑑賞と基礎知識』17、「空蟬」二〇〇一年六月、七〇頁）。

（12）鈴木一雄氏は、「人間には心があり、その心から出入りできるのが魂であると解く（NHKカセット全講源氏物語（二）葵巻）」。折口信夫氏は、「人自身が、もの、中に這入って、魂をうけて来る……容れ物があって、たまがよって来る」、魂は、「働いてゐる力」ととり、たまとは「体に這入ったり出たりするものがたまだった」と解く（「霊魂の話」『折口信夫全集3』中央公論出版社、一九九五年、二六二、六三二頁）。

（13）前掲註（9）事典を基本として、改めて数えた。

（14）前掲註（4）論文、参照。

（15）玉鬘の「四月単衣めくもの」について「四月といえば、この一家が、「四月二十日のほどに、日取りて来む」という大夫監の手か

ら逃れて出立した時期と一致する」とある（「玉鬘」『国文学解釈と鑑賞別冊 源氏物語の鑑賞と基礎知識』12、至文堂、二〇〇〇年一〇月）。

(16) あかね会編『平安朝服飾百科辞典』講談社による。

(17) 前掲註（9）事典による。

(18) 前掲註（1）論文参照。

(19) 倉田実「空蟬」（『源氏物語ハンドブック』新書館、一九九六年、四四頁）参照。

(20) 前掲（註8）著、二四頁参照。

(21) 鈴木裕子「「空蟬物語」を読む」（『駒沢短期大学研究紀要22』一九九九年三月、五二頁）参照。

(22) 金秀姫氏は「空蟬物語の「いとなつかしき人香」考―『古今集』との表現的関連について」でこの歌の「なほ」の解釈を『古今集』との関連づけて読み解いている（『むらさき』武蔵野書院／紫式部学会、二〇〇〇年一二月）」や俵万智「逃げる女」（『愛する源氏物語』文藝春秋社、二〇〇三年）参照。

(23) 前掲（註22）俵万智著、三七頁参照。

(24) 針本正行氏は「光源氏の青春―帚木・空蟬を中心として―」で「相手の女性の「心の中の真実に迫ることなく自己の論理に生きる光源氏の精神世界が開示されている」と解く（『源氏物語講座 第三巻 光る君の物語』勉誠社、一九九二年、四〇頁）。

(25) 岩佐美代子（「我が染めたるとも言はじ―蜻蛉日記服飾表現考―」『王朝日記の新研究』笠間書院、一九九五年）、河添房江（「『蜻蛉日記』の歌・衣・性―歌う女／縫う女の〈物語〉『日本文学』45―5、一九九六年五月）、金子富佐子（「〈衣〉を纏う兼家―服飾記述にみる『蜻蛉日記』下巻の性格」日記文学研究2、一九九七年）等の指摘するところである。

(26) 今井久代氏は「空蟬と小君」で「空蟬の物語の背景には受領層と上流貴族の身分差、力関係が活写されている」と指摘する（人物で読む『源氏物語』第五巻―「葵の上・空蟬」、二六八頁）。

(27) 前掲（註26）論文には、関屋巻の場合は、このすれ違っている思いを決して伝わりようもない心として見据えていると指摘する。

(28) 前掲（註1）論文、六八頁参照。

(29) 前掲（註1）論文、六八頁参照。

＊なお、引用は、『源氏物語』は小学館刊新編日本古典文学全集、『万葉集』は、鶴久編『萬葉集』（おうふう、一九九三年）、『古今和歌集』は、角川書店刊新編国歌大観、『拾遺和歌集』は、明治書院刊『和歌文学大系32』による。

（博士後期課程）